

二重目的語構文の形態と意味

安 武 知 子

0 はじめに

授与行為を表わす動詞は原理的に 名詞句の項 (argument) を三個必要とする。「与える者」と「与えられる者」と「与え(られ)る物」である。これは汎言語的 (cross-linguistically) に真であると考えられるが、具体的に授与行為表現が、どのような統語形態をとるかは言語毎に異なっている。英語の場合、*give*, *hand*, *send*, *pass* 等典型的な授与動詞が生ずる構文には下記の二つのタイプがある。

- (1) John gave Mary the book.
- (2) John gave the book to Mary.

例文 (1) において *give* は二つの名詞句 *Mary* 及び *the book* と直接関係を結んでおり、例文 (2) においては、そのうち一方 (*the book*) とのみ直接結びついており、もう一方とは前置詞 *to* を介して結びつく形になっている。両者共、文法論上の議論の対象とされることの多い構文であるが、二種類の構文の存在意義についての論議はあまり見られない。大方の見方はこれらを統語上の異形 (variants) とみなすものであり、その立場からは両者の意味・機能上の違いが問題にされることはない。一般性の高い (2) のタイプの構文 (NP V NP PP)¹ の他に (1) のタイプの授与動詞表現 (NP V NP NP) が英語に 何故必要なのか、その存在意義が問われるべきである。

本稿の目的は、(1) のタイプのいわゆる二重目的語構文(以下このタイプのみをそう呼ぶことにする)に焦点を当て、その特異な形態に伴う意味・機

能上の特徴を明らかにすることである。具体的には、この構文が用いられるためにはある種の前提条件（文脈）が必要であること、この構文では授与行為の完遂という含意が伴うこと、また、間接目的語は既知情報の位置にあり、文の焦点の外側にある要素であること等を論証してゆく。この構文の統語的派生の問題については、直接論ずることはしないが、議論の中で、現在の GB 理論で仮定されている基本的な統語操作（受動態形成、*wh*-移動、名詞句移動等）の正当性を側面から立証することになる。

1. 二重目的構文の形態上の特異性と生起制限

遍在するがために、注目されることが少ないのであるが、 VNP_1NP_2 の形態をもつ授与動詞構文は特異な構文である。何故かという、他動詞とその第一義的項（primary argument）である直接目的語（意味的には被動体〔Patient〕格を担うもの）との間に他の項が介在しているからである。一般に動詞と直接目的語との結びつきは緊密なものであり、その間に他の要素の入り込む余地は、まずないという意味でこれは例外的現象である。周知のように、様態の副詞（manner adverbial）は文中のあらゆる場所に生ずることができる²と考えられているが、動詞と目的語との間に割り込むことは不可能である。

- (3) a. Carefully John read it to them.
b. John carefully read it to them.
c. *John read carefully it to them.
d. John read it carefully to them.
e. John read it to them carefully.

類型論的に世界の大多数の言語の無標の語順は SVO あるいは SOV であるが、この事実もまた、動詞と目的語との緊密な関係を普遍的な立場から物語るものに他ならない。

日本語はしばしば頑固な SOV 言語の代表とされる。授与動詞構文の無標の語順は NP *ga* NP *ni* NP *o* V である。語順の比較的ルーズな言語で

あるという一般的印象にもかかわらず何故それがいえるのであろうか。(1)
(2)に対応する例を考えてみよう。

(4) a. ジョンはメアリーに本を与えた。

b. ジョンは本をメアリーに与えた。

これらがいずれも自然な日本語であることには誰も異論がないであろう。
しかしながら、無標の語順は(4a)の方である。(4b)は適当な文脈、たとえ
ば(5)のようなものを要求する。

(5) ジョンは何をメアリーに与えたのか？

(4a)は何も前提条件なしに用いることのできる形であり、談話の冒頭など
にも生じることができる。さらに次のような問いに対する答としてふさ
わしいのは(4a)の方であり、(4b)は不適切である。

(6) ジョンは何をしたのか？

再び英語の例に戻ると、日本語の場合と平行的なことが(1)と(2)の文に
関していえることがわかる。何らの前提条件なしに、談話の冒頭などにも
生じ得るのは(2)の方であり、(7)に対する答としても自然なものである。

(7) What did John do?

一方、(1)の方は特別の文脈を要求する。たとえば、(8)のような問いに対
する答としては妥当なものであるが、適当な前提条件のないところで突然
発したりはできないタイプの構文である。

(8) What did John give to Mary?

動詞句内部の語順は VO と OV というように鏡像関係にある英語と日本
語であるが、どちらも動詞と目的語の間に他の要素が入り込んでいない方
が無標の構文であるという点は共通である。

次にフランス語の例を考えてみる。フランス語は英語と同じく SVO 言
語であるが、間接目的語が代名詞であるか否かによって用いられる構文が
異なるという特徴がある。

(9) L'homme donne le livre à la femme

the-man give + PRES the book to the woman

(男は女に本を与える)

(10) L'homme lui donne le livre.³

3SG/DAT

(男は彼(女)に本を与える)

(9) は (2) と平行的な構文であり、間接目的語が代名詞以外のときに用いられる。(10) は英語にはない形であり、与格代名詞が動詞の直前の位置に生じている。注目すべき点は、いずれの構文においても動詞と直接目的語の緊密性が邪魔されることなく明示的な形で保たれていることである。

以上、(1) に類する英語の二重目的語構文の特異性について、個別言語内及び汎言語的証拠に基づいて論じてきた。同時に、この構文には一定の文脈がある場合にしか用いられないという生起制限があることをも指摘した。この生起制限は、実は (1) 構文のもつ特徴的意味と不可分の関係にある。次節ではこの点を考察することにする。

2. 授与行為の完遂性

次の二文を比較してみよう。(11a) は自然であるのに対し、(11b) の方は不自然である。

- (11) a. He sent a package to Mary, but she didn't receive it.
b. *He sent Mary a package, but she didn't receive it.

中右(1982: 151)によると、(11b) が不自然なのは、間接目的語の項には事態が実際にそこまで及んだという接触の含意があるため、前半と後半が矛盾するからである。(一方、(11a) のような前置詞併用構文にはこの含意がない。前置詞 *to* は「目標」(Goal) を示すものであり、接触したかどうかに関する必然的含意は伴わない。)

中右(Ibid.)の指摘する二重目的語構文に伴う接触という含意は、汎言語的にも一定の根拠をもつものである。Faltz (1978: 78) によると、ピマ語(Pima)⁴においては、英語と同様に、二重目的語構文と前置詞併用表現との二つの構文が存在するが、そのどちらの構文が用いられるかは動

詞毎に決まっている。「与える」の意味の動詞 *ma:* と「送る」の意味の動詞 *ho:t* は次のように別個の構文に生じ、その逆はあり得ない。

- (12) *hega'i co:c at am ma: hega'i u:vi hek 'o'ohan*

ART man AUX PRT give ART woman ART book

(男は女に本を与えた)

- (13) *hega'i u:vi at am ho:t hek 'o'ohan am wii hega'i co:c*

ART woman AUX PRT send ART book PRT to ART man

(女は男に本を送った)

ma: は二重目的語構文を要求し、*ho:t* は前置詞併用表現を要求する。(12) では本を与えられる相手は動詞と直接関係を結ぶ頃として現れているのに対し、(13) においては本を送られる相手は前置詞の目的語の位置にある。この区別はどこから来るかというと、それはまさしく *ma:* と *ho:t* の意味の違いに由来するものである。前者には行為が実際に「受け取り手」にまで及んだという接触の含意があるが、後者にはそのような必然的含意がない。選択される構文は各々そのような意味合いを明示的に反映したものとなっている。

日本語の場合には、上述のような構文選択の余地はない。しかしながらピマ語と平行的な意味上の違いが「与える」（およびその同類語「やる」「あげる」「さし上げる」）と「送る」との間に認められる。

- (14) 父は息子に本を与えた。

- (15) 父は息子に本を送った。

「与える」という行為の場合には「与え手」の行為と「受け手」の行為との間に時間的幅はない。二つの行為が一つのまとまった行為として把えられており、(14) にはこのやり取りが成立したという含意がある。一方、「送る」という行為と「受け取る」という行為との間には時間的幅があり、両者は原理的に別の二つの行為として把えられる性質のものである。(15) には「息子が本を受け取った」という含意は必ずしもない。したがって (16) は不自然であるが (17) は自然である。

(16) *父は息子に本を与えたが、息子は受け取らなかった。⁵

(17) 父は息子に本を送ったが届かなかった。

英語の *give* についてはどうであろうか。上述のように *send* は用いられる構文によって送ったものが相手に届いたかどうかの含意の有無が生まれるのであるが、*give* の場合も二種の構文に用いられた際に同様な差異が出るのであろうか。もし出るものであれば、*give* は、ピマ語の *ma:*、日本語の「与える」とは異なり、語彙のレベルで授与行為の完遂という含意をもたない動詞ということになる。

(18) a. ? John gave the book to Mary, but she didn't receive it.

b. ?? John gave Mary the book, but she didn't receive it.

果して、(18a) と (18b) は共に極めて不自然な文である。英語の *give* も授与行為の完遂を必然的に含意する語彙項目なのである。*give* の場合に、*send* の場合のような二つの構文間の完遂性の含意に関する差が出ないのは、動詞自体の意味の中に既にそれが含まれてしまっているからである。*send* の場合にはそのような含意がないため (13) にみられる差が出てくるのである。

このように英語の場合、授与行為の完遂に関する含意は二段構えになっており、ある場合には語彙のレベルにおいて動詞の意味に内在するものとして、また、その他の場合には二重目的語構文に必然的に伴うものとして生ずるということになる。意味上の含意を内在させている動詞の場合には構文の如何に関わらずその含意は付いて回るが、その他の動詞の場合には二重目的語構文に生じた場合のみそのような含意が生ずるのである。

このことは、一つには、何故、英語の二種の授与行為表現が一般に統語上の異形としての扱いを受け、相互に置換可能なものと考えられているかを説明するものである。*give* のような原理的 (prototypical) 授与動詞の場合、二構文間に、目に見える意味上の違いが観察できないからである。

また、このことは、二重目的語構文と前置詞併用構文のどちらがより基本的なものであるのかという論議に一石を投ずるものである。二重目的語

構文の方をより基本的な語順であるとする議論⁶は、*give* に類する動詞の内在的意味と構文に備わった意味合いとの一致する方を優先させているものである。一方、前置詞併用構文の方をより基本的な語順であるとする立場⁷は、次のような二重目的語構文をとらない動詞の存在、及び、前節で論じたところの二重目的語構文の特異性を念頭に置いたものであろう。

(19) a. John introduced Bill to Mary.

b. *John introduced Mary Bill.

しかし二種の授与動詞構文のいずれがより基本的であるかという議論は余り実りあるものではない。第一節で指摘したように、必ずどちらか一方しか生じ得ない環境があるからである。部分的に、どちらでも可能な環境があるからといって、各々の構文の存在意義が否定されてしまうことにはならないはずである。二者の生起環境の違いについて、上で、前置詞併用表現は談話の冒頭などにも用いられ得るのに対し、二重目的語構文の方は何らかの文脈を要求するという点の指摘を行なった。この理由を説明するためには、二者の情報構造上の違いに注目する必要がある。

3. 間接目的語の非焦点性

Hornby (1975 : 49) によると、二重目的語構文は間接目的語が比較的短いときに採用され、長い名詞句の場合には前置詞併用表現の方が用いられるという原則がある。

(20) a. He told us the news.

b. He told the news to everybody in the village.

短いということは、典型的には代名詞で表現される既知情報の担い手であることを意味する。一方、長いということは、完全名詞句 (full NP) の形をとる新情報であるという意味に他ならない。したがって、二種の構文の交替は情報構造に帰因するものであることがわかる。

通常、人が発話を行なう場合、相手が何を知っているか知らないかをまず考慮する。その上で相手の念頭にあることを出発点として相手の知らな

いことを伝達しようとする。その際言いたいことの主眼は新情報にあるのであり、そこが文の焦点を形成する。授与動詞構文の場合、主語以外に名詞句の項が二つあり、理論上、複数の新しい情報を伝える機能を有することになる。しかしながら、実際、一度に二種類の新しい情報に対峙し、データ処理を行なうことは人間にとって負担が大きい。したがって、普通いづれか一方だけが真正の新情報で、他方は既知情報に属する種類の情報であるというのが望ましいし、事実、そういう場合が多い。既知一新の順で二つの項が並ぶのが望ましい⁸とすると、その組み合わせに対応して二種類の構文が選択されるという図式が成り立つ。二重目的語構文の場合には動詞に後続する二つの名詞句のうち後者が情報の焦点である。前置詞併用構文の場合には前置詞句にその焦点の中心が来る。⁹

二つの名詞句の組み合わせ如何で一方の構文が容認不可能となることは当然予想される。

- (21) a. John gave it to Mary.
b. *John gave Mary it.
- (22) a. John gave it to a girl.
b. *John gave a girl it.
- (23) a. John gave it to the girl.
b. *John gave the girl it.
- (24) a. John gave it to her.
b. *John gave her it.
- (25) a. Who did John give the book to?
b. *Who did John give the book?
- (26) a. Mary was given the book.
b. *Mary was given the book to. (Erteschik-Shir, 1979)

(21)―(24) の (b) 文が不自然なのは、一番情報量の少ない代名詞 *it* が焦点の位置に生じているからである。¹⁰

(25) の二文における容認可能性の違いは、各々が次のような構造から、

「*wh*-移動変形」によって生じたと考えれば自然に説明される。

(27) a. John PAST give the book to *who*

b. John PAST give *who* the book

つまり、*wh*-疑問文の焦点を形成する *wh*-句が (a) 文の場合にはしかるべく焦点の位置にあるため適格であるが、(b) 文ではそれが既知情報の位置に生じているのである。

(28) の場合も同様に、次のような下位構造を考え、それに「名詞句移動変形」がかかって出てきたと考えると自然な説明が可能となる。

(28) a. [_{NP} e] was given Mary the book

b. [_{NP} e] was given the book to Mary

受身文の主語の位置は話題 (Topic) の位置である。したがって、そこに生じ得るのは既知情報に限られる。(a) 文における *Mary* は既知情報扱いとなっているため主語化が可能であるが、(b) 文の *Mary* は新情報でありしたがって主語の位置への移動は阻止される。

下記の例は、両方とも容認可能であるが、どちらか一方の方がより好ましいという母国語話者の反応がみられるペアである。(✓のついている方が好ましい表現である。)

(29) a. John gave a book to Mary/the girl/her.

b. ✓ John gave Mary/her a book.

(30) a. John gave the book to Mary/her.

b. ✓ John gave Mary/her the book.

(31) a. ✓ John gave the book to a girl.

b. John gave a girl the book.

(Erteschik-Shir, Ibid.)

これらの対が示しているのは、(31b) のように、明らかに二つの名詞句の担う情報の順番が新から既知へという形となる場合を除いて、一般に二重目的語構文が好まれるという事実である。

しかしながら、二重目的語構文が好まれるのにはもう一つの理由がある。

それは、人間や動物を指す名詞句の方が無生物を指すものより文中で最初の方に現われるという原則である。Ransom (1977) はこれを「人間性・有生性に関する制約」(Humanness-Animacy Constraint) と呼んでいる。本稿で今まで論じた例は総じて間接目的語が人間、直接目的語が物であるものばかりであり、この制約には文句なしに合格している。実際、多くの文法書には、「間接目的語は有生でなければならない」という記述がみられる。¹¹ しかしながら、厳密には必ずしも そうではなく、次のような例もある。

(32) He allowed his imagination full play.

(33) We still have to give the book a title.

(安井, 1982)

これは、この制約が絶対的な拘束力をもつものではないことを示すものであろう。また、上記 (3) の例は「既知から新へ」という自然な情報の流れに関する制約と、「人間性・有生性」に関する制約とが衝突する場合にはどちらが優先するのかという、それは前者であることを示唆するものである¹²。「人間性・有生性」に関する制約には従っていても、情報構造上の原則に逆らった構文は好ましくないのである。

二つの名詞句の情報価値が等しい場合について次に考察してみよう。

(34) a. John gave a book to a girl.

b. John gave a girl a book.

(35) a. John gave the book to the girl.

b. John gave the girl the book.

これらはいずれにしても奇妙な文であるというのが大方の反応である。というのも、これらの使用される文脈が思いつき難いのである。一文中に複数の新情報があるというのは、聞き手の情報処理を困難にするものであるし、同程度の同定可能性 (identifiability) を有する複数の名詞句が存在していたのでは、話者の伝達の意図がぼやけてしまう。Erteschik-Shir (Ibid.) によると、ほぼ等しく奇妙な文ながらどちらかというと (b) 文よ

りも (a) 文の方が, (34), (35) いずれの場合にも 好まれるという。前置詞併用表現の方である¹³。「人間性・有生性に関する制約」の観点からは (b) 文の容認可能性の度合いは十分高いはずである。にもかかわらずそうなるのは, やはりこの制約が決定的なものではないことを示すものであろう。本節での中心的問題, 即ち二重目的語構文における間接目的語の非焦点性という観点から眺めるならば, ここでは直接目的語と間接目的語の情報量に差がなく, したがって, 特に前者に焦点が当たり, 後者が非焦点化しているとはいえない。二重目的語構文採用の動機が弱いのである。

以上の議論から明らかになった間接目的語になり得るものについての原則——すなわち非焦点化された既知情報に限られるという原則——の存在はこの構文に対する種々の変形操作の適用可能性をも説明するものである。次の用例は Oehrle (1983) からの借用である。

- (36) Maxima showed Minimus the invertible matrix.
- (37) Minimus was shown [_{NP} e] the invertible matrix.
- (38) *Who did Maxima show [_{NP} e] the invertible matrix.
- (39) *It was Minimus that Maxima showed [_{NP} e] the invertible matrix.
- (40) *Minimus will be difficult for Maxima to show [_{NP} e] the invertible matrix.
- (41) *Maxima showed [_{NP} e] the invertible matrix Minimus de Minibus Smithibus.

間接目的語の位置に生ずることができるのは既知情報に限られるのであるから受身文の主語となる資格をもっている。(37) は適切な文となる。このことは既に用例 (20) に関連して述べた。ところでその他の移動変形にとって間接目的語は総じて入手不可能 (inaccessible) である。(38) は *wh*-移動, (39) は分裂文の焦点の位置への移動, (40) は *tough* 移動, (41) は右方転位 (right-shift) の結果である。受身変形の場合とは異なり, これらの移動変形は文の焦点となる項目を対象とするものであり, 非焦点の位置に

ある間接目的語には適用できない性質のものである。

最後に、間接目的語の非焦点性は、それが文尾にないということだけに由来するものではなく、二重目的語構文に内在するものであるということを示指摘する必要がある。次の例のように情報の新しさとは無関係の移動があるからである。

(42) He gave to his friends much of the time he should have given to his wife and children.

(43) They hoped that the United Nations Organization would bring to smaller countries freedom from colonialism and imperialism, and peace instead of war.

(Hornby, Ibid.)

これらの例は重名詞句移動 (heavy NP shift) によって生じた前置詞併用表現の文体上の異形である。前置要素が非焦点化を受け、代わりに後置要素が焦点となっているというわけではない。二重目的語構文とは本質的な性格の異なるものである。

典型的な間接目的語は代名詞であり、談話に登録済みの人物である。話者あるいは聞き手であることも多い。

(44) Have they paid you the money ?

(45) Will you lend me your pen, please ?

(46) Pass me the salt.

これらに対応する前置詞併用表現には比較対照の意味合いが伴う。文脈上当然予想される言わずもがなの情報に必要以上の焦点が当たることになるからである。

(47) Have they paid the money to you ?

(48) Will you lend your pen to me, please ?

(49) Pass the salt to me.

このように、間接目的語となるものは情報量の少ない、したがって情報伝達の目的のためには余分な、しかしながら文法上は省略不可能な要素の一

つである。発音上、そこに強調ストレスが置かれることはないという事実もまさにこれを裏づける。実際、口語では *Gi'me a pen* のような縮約形も数多く認められる。

本節において論証してきた間接目的語の非焦点性、およびそれにまつわる諸々の事実を総合してみると、我々の扱っているものは、一種の接語化 (cliticization) 現象であるという結論に到達する。常に形態音韻上の融合が認められるわけではないが、たとえば、Oerhle (Ibid.) は、(38)–(41) における間接目的語の入手不可能性を論ずるに際し、「動詞＋間接目的語」を統語上ひとまとめとして扱う可能性を示唆しており、その議論はこのような間接目的語の接語的性格を把えたものであるといえる。もし間接目的語を接語とみなすならば動詞と直接目的語との間を間接目的語が分断するという、第一節で論じた語順上の特異性の問題も解決する。この形態上の特異性はみせかけだけのものであって、実際にはこの構文においても動詞と直接目的語の結びつきは保持されているのである。さらに、第二節で論証した授与行為完遂の含意も、動詞と間接目的語とが意味的に不可分のまとまりを成しているのであるならば、当然生ずるはずのものであろう。

4. まとめ

本稿では、英語の二重目的語構文の形態と意味・機能との関連について、様々な観点から考察してきた。その結果、この構文は独自の機能を内在させた構文であり、その生起制限や、構文に伴う独得の含意は総じてその形態上の特徴もしくは間接目的語の接語的性格に由来するものであることが判明した。本稿では扱わなかったが、対応する前置詞表現が *for* NP の形となる、いわゆる利益の与格についても興味ある事実があり、これについては稿を改めて論じたい。

〔注〕

1. 実際、この構造は、授与動詞に限らずどんな他動詞でも生じ得るものであり、統語上極めて頻度の高いものである。 *John hit Mary in the garden, I left home at eight. John made it by hand.*
2. あらゆる場所といっても一応句節点 (phrasal node) のレベルでのことであり、動詞句以外の句節点の内部に入り込むことはない。
3. これらは3人称与格代名詞の場合であり、その他の場合は別の形をとる。それにはそれなりの理由があるが、ここでは立入らない。
4. 米国アリゾナ州南部からメキシコ北部に居住するインディアンの言語。Uto-Aztecan 語族の一つ。
5. もちろん「父は息子に本を与えようとしたが、息子は受け取らなかった」という表現は適格である。
6. たとえば、「新英語学辞典」(研究社) p. 575 l にそのような記述がみられる。
7. 与格移動変形 (Dative Movement/Incorporation) を仮定する立場であり、たとえば Whitney (1982) 等。
8. Kuno (1979: 280-2) を参照されたい。
9. 実際には、この構文の場合は焦点の範囲に幅がある。John [gave [the book [to Mary]]] のように、[] 内の部分どれもが文の焦点を形成し得るという性格をもっている。
10. ⑭の場合には、両者共代名詞であり、既知情報を担っている、と考えられるにもかかわらず、(a) 文の方が自然なのは、*it* は決して焦点を形成し得ないのに対し、*her* の方は対照焦点になり得るという違いに由来するものと考えられる。
11. たとえば, Hornby (1975: 49) を参照されたい。
12. Ranson (1977: 425) にもこの点に関する言及がみられる。
13. Erteschik-Shir (Ibid.) は (34a), (35a) のに対して、それぞれ次のような文脈の存在可能性を指摘している。(i) *What did John do in the school play?* (ii) *Who did John give the book to?*

REFERENCES

- Allerton, D. J. (1982) *Valency and the English Verb*, London: Academic Press.

- Erteschik-Shir, Nomi (1979) "Discourse Constraints on Dative Movement," in T. Givon, ed., *Syntax and Semantics, vol.12*, New York: Academic Press. pp. 441-468.
- Faltz, L.M. (1978) "On Indirect Objects in Universal Syntax." *CLS 14*. pp. 76-87.
- Hornby, A.S. (1975) *Guide to Patterns and Usage in English, 2nd Edition*. London: Oxford University Press.
- Kuno, Susumu (1979) "On the Interaction between Syntactic Rules and Discourse Principles," in G. Bedell et al. eds., *Explorations in Linguistics: Papers in Honor of Kazuko Inoue*. Tokyo: Kenkyusha. pp. 279-304.
- (1980) "Functional Syntax," in E.A. Moravcsik and J.R. Wirth, eds., *Syntax and Semantics, vol.13*. New York: Academic Press. pp. 117-136.
- 中右 実 (1982) 『格の表現形式：英語』 「講座日本語学 10 外国語との対照 I」 東京：明治書院. pp. 139-158.
- Oehrle, R.T. (1983) "The Inaccessibility of the Inner NP: Corrections and Speculations," *Linguistic Analysis, vol.12, No.2*. pp. 159-172.
- Ransom, E.N. (1977) "Definiteness, Animacy, and NP Ordering," *BLS 3*. pp. 418-429.
- Whitney, Rosemarie (1982) "The Syntactic Unity of *wh*-movement and Complex NP Shift," *Linguistic Analysis, vol.10, No.4*, pp. 299-320.
- 安井 稔 (1982) 「英文法総覧」 東京：研究社.